



野槌

下二



門イ曾4  
775  
291



花は流るるよ月かく戸に  
雨もむらして月をこひし  
あゝぬもなげなほ情ふ  
梢ありあをまよふ庭を  
あのをまぼくよよ毎  
やぐあさよよ常れが  
てをどもつせりい  
事くふ花のちりり月乃  
いりり事あれごとく  
枝かの枝ありあがり  
のるあは事も始  
情も花くよを  
あはれ男女の



うさぎを思ひあはせりて  
あつしをさき雲井を思ひやり  
ひししとこのぶらそまこの  
はくあれたを子星の  
味ちくありそゆいで  
さゆやうそあつた山の  
のよは敷く地しづれ  
これくもなるり  
やうるり葉のこは  
ふあうん友も  
たどはゆりも  
でも月の影を

とこののしうあり  
う海ももろもど  
食の人こそまこく  
ゆらりより  
酒の連なり  
ぬ泉もふまあり  
あやほを  
あしやう  
さみ  
とそ  
なごあり  
さあ

あゝうひさりのぬくあぬてこしをさし巻まり  
あてをうひはく一車もるのうらぐ海が  
つそとありからい物とまひついでつりさぬ  
まは又さうんまてこつひておりぬさく物とのみ  
みじとありなりぐ都の人お松さく氣あぶ  
ハ子なり睡すていともるつわくを南くありいまつらに  
とらわ人のうらうらありやをさ海ありともまよ  
びかつはぞつらあくるんとする人お松何と  
なくアサヒ葵あをうつらしてあゆりささよぬれれ  
わやぐあひびとよする車もる床もきとうれ  
かまらあど思ひよすれハ牛飼ウシケト顔あおらる  
まらもありわくくもさうらくもくもはら

くよけいふるもほれくるさぶ言のほ  
まはきそるさけり車もはあくるみ井修り  
人もつらうりつらん物をまされ成  
て車もお強うらうらもまみぬれハスレ麓ふもとた  
足もつらうひ目おあはらびさまあり  
ゆくこせせのさあも思ひあつてまをれ  
ハオホナ大おほ橋はしもさう祭もるをいおれ夜棧よせ敷の  
おをあらうりふ人のさくもらうあまい有さ  
ありぬせの人教もはのいおぬさぬにうけ  
人さかすせうんのちり親方おぬさくま定つらあり  
とぬ程あく結つはぬさく大なりウツク器うつく水を入  
てほそたあかさをさあもさうにさくさく車も

くれしとふもさしこころまなすくめらぬは  
厨がそつぎぬて一都の中よかぬと人志をさる  
目かまぐらうは一日ふ一人二人のみをらんやち都  
野舟園りくね登ふも送る教ねるる目を  
あれどさくさぬ目かぬこれ権をひきくもの  
作らしてうちさく程なり一うらさいほまうが法  
よまめもようば思ひひるぬに死期也言ふまで  
あぐれまよち程かちさくさ不思議也ありとも  
世と法さうまい思ひるんやゆかあさそらよもの  
と双六の石と作りてさそるさかろはほいこ  
らまん事しづれり石ともあささかろ  
あささひしつとねねまいうおおいのぐれねえん

まやまやさふれは気まぬさけりやまの  
まもろがまごりまはれり兵は軍よみりは死  
みりり記事と知て家をもりそれもはまさる  
世とさしひらりおは席よふ閑も水ねさまで何を  
ひてまことよあよあま思ひりいひあけね  
あつらるる山の奥を帯ねるにさかひまうは  
らんやま死よろぞり事いささ法珠もさあ  
るにねね

花はあかりぬ  
けりは句のねまなまふあう花あさり月  
く南を記とみるのまあさす花の未罪れ  
時もちりりま記さほも月のささく秋も風ぬ

の味もろりよんあへさくあり

蔡君謨吉祥寺探花詩花未全開月未圓看花待月  
思依然明知花月無情物若使多情更可憐蒙菴云  
二未字有意此是花月之開情也花月無情猶能動  
人之感觸所謂多情却被無情惱意

く満ありと 沙海よ阿の字曲の字とあり

たれにめて たまこめてまのり帯もあなまに

待し梅もうつろひよあり

歌は詞くさ 亦は不席也

くくありか人 禎の字あり

新事も 月花のまあすよ月花と

いひて下に男女の事といひんとてかくせぬ  
詞つてさよ

ねしとれは かりし常れと云ふ也

男女のたまけも 是よりあ好むといふと

たまでねをけりた意のたまけあきと也

をきく雲舟と わさりをよむる雲舟とぬ

ともうしり月のおらありあふまそ

望月は 十五夜の月とよ

謝希逸月賦美人邁兮音塵隔千里兮共明月

唐李峤百詠三五二八夜千里与君同

白氏文集三五夜中新月色二十里外故人心

曉ありくありて 古今席秋の月とろりよあり

つよは雲よあはれ

まへて月記をい 莊子駢拇篇吾所謂聰者非謂  
其聞彼也自聞而已矣吾所謂明者非謂其見彼  
也自見而已矣 遵生八牋五云水樂洞雨後聽泉  
杖 輩豈無耳哉更當不以耳聽以心聽

去ハ家と云

山谷詩春去不窺園黃鸝頗多語

月の如ハ園のうら

杜甫詩今夜鄜州月闺中唯獨看

あゝめもさず ろゝめもさず

まのりあり 大井河岩浪たう 杖士よ筆は

紅葉にあゝめもさず

泉めは 李義山秋風景花上曝視清泉濯足

祭るゝさゆ 賀茂の祭あり

核者不用ありとて 祭れらるゝと約知と核

あゝるる事一不用ありと云也

あゝるひけゝこのわりて 奥なる屋より

核者ハ恨ハ致さぬものかゆ也

みやこの人のけゝをけりハ ゆゑあゝハ善悪

もはらう初也爰にてハやめり初也

あゝるひをせりて 賀茂の祭れ自あふひと

くはらあり

きゝりゝゝ 義乘ハ義也

くそちゝはら車 尺牘の車あり

既うろりしき みざれりしき也

源氏夕影ユウカホよりうろりしき オホチ人物のまかり

しそあり

みざれたるみも サシジキ 板敷たるあり

世のきまり オホチ 宗此始終とて世る活礼威

衰は事とわりひ オホチ ちきあり

大物とみ オホチ 足物群集は人の皆のい

と知べ オホチ 我もき オホチ ぬん也

あうり オホチ 源語類聚云巨巨等や オホチ 多也

大なる器 オホチ の水を入 オホチ 漏刻の水は皆漏りはく

海不能實 オホチ 漏危 オホチ 後漢書王符傳山林不能給野火江

一日よ一人二人のく オホチ らんや

神代卷上云伊弉册尊曰愛也吾夫君言如此者 オホチ 吾

當益救汝所治國民日將千頭伊弉諾尊乃報之 オホチ

曰愛也吾妹言如此者吾則當産日將千五百頭 オホチ

多部野 オホチ 上をよん

舟墨

西り舟墨 オホチ 汝を オホチ けり オホチ 汝救う オホチ ひて者 オホチ 人

よ オホチ 君 オホチ と オホチ り オホチ けり

ひつ オホチ ま オホチ と オホチ ひ オホチ けり オホチ の

淮南子 オホチ 鬻棺者欲民之疾病 オホチ 鬻賣也

孟子公孫丑矢人惟恐不傷人 オホチ 商人惟恐傷人 オホチ 平匠

亦然故術不可不慎也 オホチ 注 オホチ 巫者為人祈祝利人 オホチ 生匠

者、作為棺椁利人死、趙岐注云巫欲祝活人匠梓匠  
作棺欲其蚤售利在於人死也

和名集云棺音官一音貫和名比止岐音貫取以盛屍也

二一三五二二四一一三一一二二一

ぬい黒白のふとをくべてかぢりて十はあふると除也

すぬき、脱字すぬきとむじ家よてふ

川抜の義をりて

水もどしてあそび

唐田遊岩隠箕山高祖幸其門曰先生此佳否答曰臣  
泉石膏肓烟霞痼疾

糸すきぬれはほろ葵あううなりとて或人好  
巾簾をり紙をれをりてゆりてうきとく  
あそびゆりてよき人のあそび事なれはゆりてき  
よきゆりひりて周防内ゆり

かかれぬもひりて物なりぬあまらぬ屋中簾を  
あつれぬありたり林をよあふりて家此集よりけ  
こころぬ歌のこころなきにぬれありあひぬきて  
ゆりてゆりともゆりて枕をあふもあひてこ  
ひりて物ぬれたり葵とくきりてそいぬきなる  
うきとくひりたりぬ鴨長明うき季物集にもむ  
ぬれはなるあひひりてまわりたりとてうきぬきとの

れとくわくふくもあつて紙名抄をくいつくごり  
づきお帳よかきさばくはむも九月九日菊ぬれ  
う向くともいひふいふ掌おありませもるを  
あつそ柘杷望た居まうこれおてはたきお帳の  
内ふゆいぶくはむをどののう積るが作りを  
んそおありさうぬ福をな紙がわけはくと辨  
乃女のうおつては七事一あやめおありあり  
あがくともはつてはよき〜

は辰の祭も賀茂の祭也い日人あふひうつれ  
漫せがらふ也賀茂松尾の社日よりの日よと志  
うりくさあ〜ちる四月中の酉の日也公事  
根認よる〜り又祐道具あふひとく

ゆゆよ榮雅のあよ前や〜と兼のみふ  
あふひあふひあふひあふひあふひあふひ  
ねねあふひあふひあふひあふひあふひ  
葵無用ありとあり  
周防回信 周防守純仲り女存冷泉院の女房  
うる記おありはが記 新古今はあふひあふひ  
あふひあふひあふひあふひあふひあふひ  
實方い〜のあふひあふひあふひあふひ  
うらう〜のうらうらうらうらうらうらう  
よる人〜あふひあふひあふひあふひあふひ  
悲〜あふひあふひあふひあふひあふひ  
枕草子 清少納言作 三冊あり

鴨長門の四季物語

四季あり

くは玉 公事根深云五月五日節會天皇武  
 注殿よ出仰なりて宴會を行はれ群臣に酒  
 と所也内弁あども四節も向一人の湯あや  
 めはうづうをかく日けのあつうはうと典茶  
 寮あやめ乃はくみとまの群臣に茶玉とあ  
 む色乃のいとを以てひらにこれの悪鬼とま  
 とり本又作り 荆楚歲時記よ長命縷  
 續命縷にあふもこれなり  
 枇杷皇太后文 昭宣公女朱雀院母后穂子  
 作るぬ糸と 千載集 弁乳母  
 高浦常洞の玉ぬ糸と作るぬ糸と

づう糸と作る 七 江戸は玉ぬ糸とあや  
 めはあふもこれ 後野のあはれ相やあ  
 漢野の寝あふもこれ あやめるよもの  
 作るあふもこれ 人の門をあけける  
 きよぬぬ糸とのあふ新拾遺にも載り  
 記あふ枇杷の皇太后文がこれと云ふのら  
 注のうらと作るぬ糸とあふのまゆりたれと  
 ろく皆注うらり高浦常洞のゆりらるを  
 ぬてよめぬ糸とあり

家よありうとれたあをねさうう松ハハの葉エウもさう  
花いひさるりさういさう松ハハの葉エウの都ナラ  
けふありけるをばははせよおほく成結りむり  
吉野の花たをばさうう若松ワカマツとくめさうあれ  
いさう松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう  
さううういさう松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう  
むいさうのつさういさう松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう  
ひさうさうりさういさう松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう  
よあひさうさういさう松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう  
さういさうさういさう松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう  
あがさういさうさういさう松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう  
ありさういさうさういさう松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう

をばさういさう松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう  
けりさういさう松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう  
柳又ヤナギけりいさう松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう  
あがさういさうさういさう松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう  
り花ハナさういさう松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう  
山ヤマ吹フク友トモ松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう  
あがさういさうさういさう松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう  
われもさういさう松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう  
らばカキ松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう  
榎カキさういさう松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう  
かさういさう松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう  
いさういさう松ハハの葉エウもさういさう松ハハの葉エウもさう

あつらひたる物もよきぬ人のりて奥なるもの  
ありきやうは物もよきありきん

松のぬ家 唐詩鼓吹よ李賀五粒松は秋作  
ふとあり五葉は松あり

酉陽雜俎世言松五粒者粒當言鬣自有二種名鬣  
皮如鱗甲結實多新羅多此種

八音橋 一糸院の山所なるはつと橋は人  
のなりきりと沖あふゆりれはまむと海  
りてありまの仁きれはまむ作坊去傳  
いしのをは秋の八音橋より五音は白ひり  
邦

吉野乃花 古今亭春好のよき山

橋の人磨うんめい雲うくのりんえりり

左近はさくく 内裏に左をの橋右近は橋を

うややう 異風并あり

新らけは侍の字也はき

角きき也万葉をうや見まかしの二橋

てやにもかきも福り宗人邦

ころ多し 事印也ころきん也

暁橋と書 玉荊公詩山櫻抱石

狀松枝比並餘花開最遅只有春風嫌宗實吹香

渡水報人知此詩と本集よる山橋と歌をり

余芳備祖にハ橋桃の部及入り

生き梅 東坡詩二月驚梅晚幽香此地無

京師の入后 風雅集十五定家々はあうはみ  
 くの家のまがりてま入てやどくゆけるあり  
 かのまづううてゆり梅の本枝よじすひ  
 けをく 永福院の侍 ますきか宿を  
 昔はゆりてかりぬ折く句よ梅うえ  
 七一 新大納言考世 くらみゆかうはれ  
 瑞梅うえも又うりつとまを結  
 卯月がりのわうらで 杜牧詩霜葉紅於  
 二月花よりひ或は又新緑勝花をうらふ  
 うり  
 池ゆる蓮 謝靈運庐山入て東林の池を  
 垢蓮とてうり蓮と賞うりものおるれも

こまにうりあうらふ周茂新あり  
 めぞうに物あり 愛くく物也と云義也  
 きらがり 桔梗也 古今物の名は秋らう  
 雪のぬよりり白き花をうり葉もいらり  
 あり  
 志とに 紫苑也 ほとむと云  
 われもう ちがらうと云葉也と云説あり  
 けきくの霜枯れみ くれはう 秋一葉  
 とらう句ひありり 桜衣  
 月令 龍膽也  
 芙蓉 月令よ菊有芙蓉とあれは菊むい芙蓉な  
 り瓜正色と云

河やう ちいさな川も河海に細く并ぶ  
 かしめきいたる名 奇位の草を愛し植て  
 沖津も知らずの本草にもんぞるんや  
 りりおろしきつらいつめくささくもやれども海石  
 榴ハ博望が西域に使しこよりま種と名あり  
 中国よりいらする韓退之王元之吟詠を  
 しもあつて海棠ハ海外より来りてあれど  
 楊妃ハ睡よきとくより嵩山の思惟樹を西天に  
 貝多也唐人の詩より貝多文字古く作まり戎  
 王子ハ月支國の花の名也杜老が詩より万里戎王  
 子の作まり又字書にも傳きぬるらん檀木  
 を植ふる事も杜詩よあれありや

乃銘して財殖多事ハ智者のそげり也よ  
 うぬ物さくりに置るるもほいさくよさ物さん  
 とさあらんさくさかーさくさくおわらるゆ  
 口程一紙にそえめをとりふものどもあて跡よ  
 あさうらひさくさあーほいされおらんさす  
 物あつたつららんさくさくさくさくさくさく  
 てうかいせん物さあさめさあはれもたぞそ  
 あさうらひ

ころりさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
 前漢書韋督及子玄成俱以明經至相諺曰遺子黃  
 金滿籩不如教子一經 山谷詩遺金滿籩常作災

庵徳公居峴山之南平生不入城府刘表问曰先生不肯  
受官禄何以遗子孫曰世人遺之以危我遺之以安後漢書

古人の賢なり者いさめり者もくま一家の徳石  
れ多くしる事にして美談とん唐元載胡樹  
八百石晋石崇錦步障六十里ありし  
一して益かありき伏波將軍財を親族  
故帥は一ほごうして世の人のあつめける  
守銭乃奴ありとある誠まやさしき志なり  
ト

悲田院亮蓮上人の俗姓は三浦のあぶら一  
やまうちとて武名也おんは人のあつめける  
よりすして吾妻人そのひつる事いたのま  
るれ院の人をあつめけること實なり  
ソひを盤うれはさうそおほくめとて  
ハ都みえくほてなれんゆりみ人の  
とほりしとみゆりばるてんやうま  
怖ありぬ人のつらむとの事やましくいひ  
るく前えひひるれん人はくしうきし  
は偽んといひりしとましくれぬ人の  
あれはあつとちいさぬ事おうま  
あづり人の我いされけぬ人のあれく特

とくればひそくはそくよりなるものなればいふにめ  
よりいかにせしむてやむぬあまのひひゆるれ  
と人あはれよの戸はくぞうしやあはれしむる  
こそこけひびくし声うらなげみありく  
て程教のこまやうなることりりいひわさま  
どもやとろひひくこの一言のなれく成て  
ねんうらあらふらともほつちくわくわくや  
きこらほありてその益もあつてこそとえは

悲田院 拾芥中末云在鴨川西畔施藥院別所也  
養孤子病者也 延喜左右京職式云凡京中之路邊  
病者孤子仰九ヶ條令其所見遇随使必取送施茶  
院及悲田院

けうるに 兵双 兵右をうぶ物也

吾書人 異本あつたものゆゑとあり

もうさハ 極者也

日本武志 東征の時 橋姫海より死を尊

仰りより 孫ふ及て 東とくり 橋姫の事

とろひが 吾孺やとのひひより 東を

あつたふ 日本征へ ゆれも 喉が 和名

文選を引て 意鄙とつて せよむ くれハ

東方より くるか くれと くれハ

関東を引て あり

聖ろれ 聖ハ 堯蓮也 くれり 堯蓮

此卷 詞あり



さしていざしと人をあむびつゝさあはらひよれおこ  
りけいやくを西とやめ氏をさそて農とまらめと  
下に利あらんこと物いあらうらそ衣食為  
考なりうらふひびとちん人をう謀れ盗人  
とふりあふ

論語不以人廢言又子貢曰君子一言  
以為知一言以為不知言不可不慎也

左傳韜茂字然明晉叔向如鄭然明從收器者立  
於堂下一言而善叔向曰必韜茂也下堂執其手  
以上曰子如不言吾幾失子矣  
荒夷也 心勿記回舍人也

禮記雜記下孔子曰少連大連善居喪三日不怠

三月不解期悲哀三年憂東萊之子也注言其生  
於夷狄而知禮也

子放にしてそ前ありれ也 池の底は楸杓と  
たまけ然谷り敷威を多きんとすりも我  
るはと紙思ふゆ也又子の名を天倫をれ  
をれありれと思はらん 陶淵明の「刀を  
やとひ我子のり」と送うて汝ら薪水此方を  
しとく是も又人の子也よく過せと一と  
心仁愛の底也されば子として父母の心とうを  
て子の心とせばそのつゝ孝もまられられ  
不承乎子以事父未終也といひ子を思ふ  
ことおやを思ふこと心身を思ふこと也

去秋すみ 白氏文集偶吟詩眼下有衣兼有  
食心中無喜亦無憂正スレ如身シ後ノチ有何事カ應向人間ニ  
無所レ求ム静ニ念道ヲ徑深ク閑ニ自ラ閑ニ迎ム禪客ヲ小低頭ニ猶殘シ  
許雲泉真一歲龍門教ヲ度遊ス

沙石集才四ハ詩ヲ引キてハありすみと云々人の  
一物もももありもとり只カ也ノ廊ノはハつトと  
とあり應向ハ足ヲあみとてねと云々也ノ也ノ也ノ  
あくくくて杖ツはくやどの地も持ぬと云々と  
一物もももありもとりどからの地も持ぬと云々と  
てわりカハハよクげセるハ事ハあくくくて佛  
乃修シ約シつトと云  
匹ハ匹夫の義ハとて無一物ノ独リありと云々と云

大明ノりハ新シ法ヲ長慶集ニ見ル約シ一ハ匹  
の字と正ノの字ハあり誤也應向ハきハあり  
つトてハむハば也面牆ノの心もももと  
ほくくく 妻子也と云々よクとり  
無一物ノももありもとり 遁世者ハ人ノの妻子ハ  
ほくくくとてありハば也思ハひハあればハ勿レ論ナ  
まどももあくくくとある杖ツと云々耶輸ヤ  
多ク羅ラ瞿ク夷イ羅ラ睺ゴ羅ラを思ハひハどもあくくくす又妻  
子と愛スるハ觀ク音ヲ慈ヒ悲シれルなりと云々ハ止シ観シ  
の旨也慈好ク子と思ハふ人ノ心ハありて思ハふ  
とハつトふハげハももとりえハゆりはハんとわりひハり  
りて君として群ヲ臣トと我カのハとりと人ハ

成て少ひ百姓と子のこしく愛さばなりと

これおさまるべし

ぬきみをもつて

後漢書吳祐順帝時遷膠東侯相祐政惟仁簡以身  
率物吏民懷而不欺番夫孫性私賦民錢市衣以進  
其父々得而怒曰有君如批何怒欺之促飯伏罪性  
慙惧詣厨持衣自首祐屏左右問其故性惧述父言  
祐曰掾以親故受汚辱之名所謂規過斯知仁矣使  
飯謝父仍以衣遺之

人恒此産ありて

孟子梁惠王上篇曰無恒産而有恒心者惟士為能若民

則無恒産因無恒心苟無恒心放辟邪侈無不為已及  
陷於罪然後從而刑之是罔民也焉有仁人在位罔民  
而可為也是故明君制民之産必使仰足以事父母俯  
足以畜妻子樂歲終身飽凶年免於死亡然後取而之  
善故民之從之也輕黎民不饑不寒然而不至者未  
之有也

人きりてぬきみ

家語云歎窮則擢鳥窮則喙人窮則詐 論語

小人窮スルニ濫スル也

凍餒 孟子盡心篇所謂西伯善耆老者制其田里教  
之樹畜導其妻子使養其老五十非帛不煖七十非肉

不飽不煖不飽謂之凍餒文王之民無凍餒也老者  
北之謂也

それ書をよみたりと学ひしる人の義理を知故  
よ飢寒を力よせすれども忍事とせざること  
恒々ありと云うやう此人の百千人が中にはこれ  
也大方此人の困窮よ乃ぞみそし僻事とせし  
ぬをくともさゆ也されば王者乃政の人の飢寒  
をぬやうよする也耕作とほしめあじまは暖  
の飢をぬぐれ桑麻とて拵る布帛おほき  
ゆへは膚体の寒とせぐ山林川澤氏と利  
を日くくして一人の私とせざゆ所の材木も  
ありくくして産食とほりやまぐ鳥獸は

肉くよに走るくす農人の私と上中下も定  
めて田畠とあづけてよく作りせまわぬに  
肩あともりくよを氏の恒の産と云也君よ  
りめ此氏をめぐみ書ふ所を飢寒を憂る  
衣食よ事くくして教とせぬれ禽獸は動  
きくくくくに異れ産す是よりりて人倫の  
父子君臣夫婦兄弟朋友は五典を教て孝悌  
忠信とありくくしてむ也人間の最は此の物  
乃くありけりを行ふ理は本より人の心中よ  
ありんか一して君よ對しては忠とのひひ又  
母よ對しては孝と云是仁義の本心也よく是  
を知所の勤て善とせしめて悪とのあづく

此のゆゑなり紀也是般人教者乃及也先と王道  
と名づく堯舜の政孔孟の道也皆也公  
く者也世嘉(君)君くらくして乃たこれを見る  
乃て百姓恒(恒)は産なくして一日の飢寒を  
ゆぬれどもして況や父兄はは妻子  
と考ふづき事をやけなく或はつり曲  
て密(密)をて或はつらよ晝夜と分るず  
人を教(教)ぬれどもは亦たなり然も貧(貧)  
き者の憂(憂)をなむしは必定して不害か  
富(富)ものも尚何者(何)心事(心)のいよく不害か  
れどもよく心とほきをみまはるれ不害か  
せざるれは罪(罪)ありの罪(罪)ありふとみは也

よろしく下(下)海(海)のいお市(市)の利(利)をむさぼる  
ゆへは貧(貧)き者(者)のいよく若(若)く富(富)るも  
安穩(安)なるも此(此)めて國家(國)に治(治)まるも  
こと目前(目)の及(及)理(理)ありんあは君(君)教(教)者(者)乃(乃)  
と行(行)ひて國家(國)と治(治)めは文(文)王(王)の我(我)師(師)也(也)とい  
はるめかも

人(人)は終(終)焉(焉)乃(乃)は其(其)の事(事)なり  
人の心(心)を治(治)めはまた深(深)くして是(是)れをい  
心(心)よくよくよとをあらん人(人)をあら  
おとらりつけいひは其(其)の事(事)なり

れがこの世に生るるは人の日來れを  
にもあらずやと云ふは是れ大平の権化の人も  
たゞむしうに情なれどもさうりうむむどあれ  
たゞふあまの人の世にまよふかき

終寫ハ 際終也 馬ハ 助字也

いんぐらうー ーまきーほめー

あやーくーわらわらおとーりつせ

奇物の端おありうらぶらぶらまのまらりな

ーんかーりはらりあり

わらう人の際終の付終あるはままらりな

ひて終るは奇端をいへどもやういふこと

ままー風雷電の付は善知識はたふも

まーかーあられの病あり病よまかま

あまやうにあらうひきられの圓覺寺は洞山

佛光の頌は先僧舍利包天地莫向空山撥

冷灰といふ夢窓は炭中洞谷の中にもけん

をいつりされども常は人の平生おさく

あられも死約は際ていみじくも也文信國り

節を全してころされ謝墨山う食つてし

鐵死は内教林楚の懸勝う下にしらるる

ねものわりていも子路が纓をむらび曾子

け簣をうゆらうやまーあーゆり

事也



阿字本不生 大毘盧舍那經有情及非情阿字第  
一命又云我覺本不生 新羅國靈妙寺僧不可思  
議狀云秘密中秘教者阿字自說本不生  
阿字字と翻るる人無不非の三義あり 炳現阿  
字素光色さるる八識田中下阿字一乃生死亦  
斷 溫繁亦斷さるる密家此常談也  
馬はとを阿字と少府生と不生と字をせよ  
上人の身感應れりありあり

沖舟身秦重躬小面此下野入道信和と落馬の  
おある人也能くはるるさるるさるるさるる

ま〜か〜は〜ひ〜ぢ〜よ〜信和るよりありあり  
死す〜たり及み去〜りわ〜一云神此〜  
と人思つりさるるさるる相ごとく人の心は  
さるるて飛塵〜して沛々のるを好〜るは  
おと相を侍りき〜りさるる誤〜るを云  
りり明雲座主相若く〜を造してあはれ兵は  
此難やある〜る相人識〜るおあり  
ま〜と〜り〜るおぞ〜る治家れハ傷害  
のをうれあり〜るま〜り〜り〜り  
かくおぼ〜り〜り〜り〜り〜り  
おみのきぢ〜るり〜り〜り〜り〜り  
あ〜り〜り〜り〜り〜り〜り

沛艾 文選藉田弒龍驥騰驤而沛艾注馬行兒  
以相と相とゆり 沛氏相意やましくゆり  
と相とゆり

沛艾 文選藉田弒龍驥騰驤而沛艾注馬行兒  
以相と相とゆり 沛氏相意やましくゆり  
と相とゆり  
いつくふりあやまりくる 何れ字也いつくふり也  
莊子達生篇東野稷以御見莊公進退中繩左右旋  
中規莊公以為文弗過也使之鈎百而反顏盪遇之  
入見曰稷之馬將敗公密而不應少焉果敗而反公  
曰子何以知之曰其馬力竭矣而猶求焉故曰敗  
家語魯定公問於顏回曰子亦聞東治毘之善御乎  
對曰善則善矣雖然其馬將必逸公不悅其後三日  
東治畢之馬逸公聞之促駕召顏回々々至公曰前

日寡人問吾子以東治畢之御而子曰其馬將逸不  
識吾子奚以知之顏回對曰以政知之而已矣昔者  
帝舜巧於使民而造父巧於使馬舜不窮其民  
力造父不窮其馬力是以舜無逸民造父無逸馬  
今東治畢之御也歷險致遠馬力盡矣然而其心猶  
求馬不已臣以社知之公曰善哉吾子之言其義  
大矣顏少進乎顏回曰臣聞之鳥窮則喙獸窮  
則攫人窮則詐馬窮則逸自古及今未有窮其  
下而能無危者也公悅群書治要十  
明雲 久我太政大臣雅實公孫顯通卿子也  
山門の座まや

箭ヤありありとせしむり

嘉永二年天倉座より雲傍正と法住寺に由り  
振替し然り十月十九日本為義仲兵と率し  
法住寺敷と賣やりの傍正も馬に乗て遁ん  
しひらりと本宿より大將楠六郎親忠が放夫よ  
腰に骨を射しせり貞送より落しひまもあがり  
然りけり親忠が席等落重て頭をとる

威裏記三十四のり

それ相の周於叔服戦國の唐拳漢の呂公許員が  
類より世にゆるり貴賤のあり其  
力より吉山れり掌より麻衣道  
若の人相終とあり衣志徹の古今識鑑と撰ふ

考るる若福あり若負賤なり若夫死の若  
刑傷若若盜賊の若りつれも主國説と記し類  
例と舉るる若孔子形陽虎も似て虞舜  
頂相重腫一様若看とるり此時ハハ術必と  
るる若若と海あり人あまるとりきと呂東萊  
特議より趣誠より古今若公論也今此版ハ明雲  
とつる左氏傳ハ六鶴退飛ハ風吹故りも宋の  
襄公は何の祥も吉山れん叔與より若若  
向くと若り法湯のり若若り若り  
明雲れつる兵仗の都やありと若りハ若り  
語る也襄公ハ若年軍もや若れ明雲ハ終り  
流夫よあり

此一版明雲座より若若と別版

三三けらる本あり

齊治キウヂのよきは成ぬれ、非事ヒシのよきが治ありと  
りあり事ありとく人ありとくもきり也格キヤク式シキありとも  
るすすとも也

格式 嗟哉サガと望むれば時弘仁格弘仁式と撰センむ  
法和ホウワと望むれば貞觀格貞觀式と撰む駿河天皇  
の御定格延喜式と撰む是を三代格式とす也  
律令リツレイと今と今とくめ法家ハフカの博士ハクシと立つ歐陽オウヤウ唐  
書ショも武德律ブツク式令シキレイ貞觀律チンカン令レイ格キヤク式シキ  
永徽律エイキ式令シキレイ格キヤク垂拱スイコウ式格キヤク新格シンキヤク教頒キョウハン格キヤク

留リウ司シ格キヤク 周元前後格 令レイ式シキ 格キヤク式シキ 律令リツレイ車クルマ類レイ等トウ格キヤク  
名ナとのせりり 我の乃律令リツレイ格キヤク式シキ之唐國タウクニクのと字ジひて  
作サセきり 唐書タウショ刑法志キョウホウシ云古コく為國タメニク者議事ギシ以制シ  
不為刑辟フタヘキョウヒキ懼ク民之知チ爭端セウタン也後世作為刑書キョウショ惟恐不  
備ヒナ俾ヒ民之知所避也其為法雖殊シカ而用心則一イチ蓋皆  
欲タク民之無犯也然未知チ夫導之以德トク村之以禮レイ而可  
使シ民遷善テンゼン遠罪エンズイ而不自知也唐之刑書有四曰律令  
格式キヤクシキ令レイ者尊卑貴賤ソウヒキケンケン之等トウ教キョウ國家クニカ之制度也格キヤク者百  
官有司之所常行之事也式シキ者其所常守之法也凡  
邦國之政必從事於此三者其有所違及人之為惡  
而入于罪戾者一斷ツグ以律リツ

四十以存乃人カノ次城くらへて三里とやつていふ  
と氣持事あり必兼て

四十以存人 明堂灸經曰男子三十已上不可不

灸三里三里所以下氣也

三里穴在膝下三寸足陽明經也或云在膝眼三寸

麻草と鼻みあそく嗅べしはちいさ記出ありと  
鼻より入て腦をむむといひ

麻草 麻のわくの角也

本草曰孟詵曰主益氣不可以鼻嗅其草中有小白虫  
視之不見入人鼻必為虫類茶不及也

頂碎録云鹿茸麝香肉蓯蓉切不可就鼻聞蓋有  
微虫

能とけりんともは人よとせじんやとあまといふ  
人みちしきしと化しとわひえそ抽出し  
らんそしと常よりふめまどかく  
ソ人一藝もなひとれいふと堅固  
うがふありと中よまじつと毀つとわ  
うにも物をつれすこと嗜む人主骨を  
たれともなありとみざりともびとて年と送  
れは堪えのたまありと子の子の位よ

いりゆけ人よりなれ双よりなれ  
也天下は物の上より下にも如く不堪の事あり  
下は瑕瑾ありきりれども人々の事を  
はやくとをたれくして救済せられ世の事を  
こそ衆人の仰とすなり事法なるべし

能くはかん 藝能也

うらつく ゆいあり

世固るなりなり 一向の心の時より云義也

つまれくすにて 強ひ強頼 ありてづら

藝能くはかん 義なり

天性は骨 せられつよの器用也

なりまぬ 泥るつますいごころぬ也

堪能 藝能よりなり器用なり

法はけ 法の長ありあり

不堪 べりぬ義也 器用なりと云

瑕瑾 二字より玉のきざれ也 恥辱ありかく

事 ことあり

乃ちなきを多し 法友とすなり也

放持をたれ みてりいせざる義也

世はけるを 情なき世の物なりと云也

善法法師の光明宗師は藤子也沙門なりて唯

識とすべしとありなりなりと云

いりくはむつとめて夏月はあつと云

て凡のこころなきは賢俊もぬを流すまであり

けきいひのく之藏サウとありたり又明詮メイセン法師ホウシ九真寺クワンコンジ  
めて法相とゆふま性コトにふくして寺テ成ナリ出デらんす  
雨滴ウラキ此庭コノニワおほねとらちてくぬつら成ナリてかくやう  
うあり地の極キョクてくるた物モノとらうのまじくまやとを  
すかりの祇房キボウふりり年トシひさしくまて法相ホツゾウ宗ソウ  
の名ナとありたり昔物コトモノありふ人ヒトありあり一ヒト居イて  
いかり地チゆらんを道ミチに丸マルとこころりたり何ナニも或人オクヒト  
芥カイと名ナとこころり昔物コトモノあり何ナニのちうとく針ハリはちん  
ありと名ナふ人ヒトふかやうのちもあやう  
吾オレうらけとます下シタよおれとて入都ニヤウくうり学ガク  
官カンして終ハカセの持チ士シと成ナリまるとすりけりく名ナのく  
云クニふ釋シヤク氏シ善珠ゼンジュ明詮メイセンありとこころり儒家ニョウガはらん  
あふびとよくせんはなごう物モノとふらん

或人乃云年トシむ午ウマ又マタなりまでとトひりりい  
らん徳トクとひ捨シへき也ナリらガ弟ナニか智チつツいイまマな  
老人の事コトとい人ヒトもえりシとトすス成ナリまマ突ツりリも  
あひヒまマくクんンらラ大オホくク前マエ乃ナリ志シらラいイやヤめメてテ物モノ  
あるアルこコめメやヤ長ナガくクあアれレまマりリ弟ナニれレ世セ俗ゾク乃ナリ事コトもモをを  
づツらラりリてテ生ナマ涯ガイとトくクはハいイ下カ愚グの人ヒトなりナリ麻マくク  
是コトくクむム事コトハハ字ジびビ字ジもモもモ教キョウとト志シらラかカハハ是コト東ツカ

れうをいしてやむべしゆゑなりゆゑにふくし  
やまんのやうなり事あり

一わ十にありきと

論語子罕篇後生可畏焉知來者之不知今也四十五  
而無聞焉斯亦不足畏也已

大戴禮脩身篇曾子曰年三十四十之間而無藝則無  
藝矣五十而不以善聞則不聞矣七十而未懷雖有微  
過亦可以免矣

ゆゑかゝるおぼろしくいふは 志意のゆるゆる思ふ

ふいせ

おぼろしくいふは 不審くおぼろしく

ふいせ

は後者たむりきとてあつてさういふはさういふは  
従ふもあつてさういふはれも高適は六十にしてけ  
りて詩と學ておぼろしくいふはれは後老泉は六十  
けりて學問と文章は名と詩とあり詩のみた  
あつて師曠が教ふはあつてさういふはあつて  
中年ありては終は日中より行ふはさういふは獨  
とありて後行かゝるはさういふはさういふは  
詩云は不努力老大徒傷悲はあつてん若くは  
はさういふはさういふはさういふはさういふは  
ゆゑに先づさういふはさういふはさういふは  
事なき物をいふはさういふはさういふはさういふは  
さういふはさういふはさういふはさういふは



静然上人

西園寺内大臣

實衡公也左府公衡公男

又竹林院と号す

資朝卿

権中納言從三位檢非違使別當後

醍醐天皇の時此人也日野俊光卿乃三男

老ゆらひて

在子に競の字をりしを

よめり

けふおれさうとく又え作とて

内府は給

ゆり八年前よりしる所也老より若うなりとを

戯もして下つてせしむりや

上巻にあり年仲と唐の物、似ありとのふり

もありこれ、唐人の詩、ち、石池中樹陰

故月下門僧、ぬ、秋苑、赤溪を掃、葉、夕陽、僧をん

つ、り、も、み、分、僧と高、勢、刺、り、也、又朝

鮮、國、小、沙、門、あり、形、甚、矮、小、と、新、

似、り、り、た、れ、人、清、は、沙、門、と、雜、僧、と、り、

う、と、慵、懶、敷、詰、と、り、り、

考、兼、大、納、言、入、道、り、り、り、り、り、り、

と、て、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

ふりよとこよとてあが浦山一廿四あらん  
只あかくそり戸りたれもいれけ  
る

為兼大納言 昆沙門堂と号す

定家 為家 為教 為兼 推大納言正二位

應長元年依勅撰進玉葉集正和元年奏覧

日二年十月十七日判發日四年十月廿八日

左使としてたれ依後(流罪せり)公卿補

任とてたり或説は為兼依後始に流され

和方三十三首と後阿弥陀佛とて不宗と後

棟をたつといは後り是よあてて教たてて嘉

元二年内治とて風雅集為兼末の由り

りたにやそ河と後りたりは後り

やそ川といはるる名あをなるまらん

く後一ませのあふとありは

六波羅 小倉家あ人の一族と京都にわき

畿内西園の政と行とて是とあ六波羅

と号す東鑑に詳あり

あがうとやゆとてさうとてちりとも地

ゆあさるゆのあがうとやま一時のち

は後おあれりてはる資財のてあか

うとやまといはるんといはるは藤氏

鎌倉に居たり帝王とてみか切雅と立て

將軍とてと力ありてはる國家とてはる

年久し我邦是れ居し君と延喜天曆乃  
時の一々一わ衆をわらげしころづる國政と  
うんともふれし男も名を力記しころるるこ  
るれりし事と遂に敵と又かきんりものと  
あつた内しころる悪いせしころんともひもかくあ  
原るるし事ありしころる資朝のふのこ  
ころるあつたころる也と氣かを禁の石乞り  
事成る那不成而烹固其職也ころひ前漢乃  
主又僊が大夫夫生不五鼎食死即五鼎烹  
取しころる一はんありしころる又荆通漢祖よ向し  
ころる乃英雄これ帝れ出り而とせんころる  
ころるはよろして見れは資朝も又わ衆ありしころる

きんともふるなり  
あつた此豊臣大將れいしころる筑あはちころるし時  
佐久前玄者としけしころるて車よのを京は出  
とわしころるれは玄者人よころるてわし軍にころる  
は筑前をめしきんともひしころるしや也かの  
資朝も後醍醐の密謀は居也ころる資朝は  
ころるれわ衆ありしころるひしころるて佐後一流され  
ころるしころるしころる不便の事あり

世人事乃門しあややころるしころるしころるし  
ころるしころるしころるしころるしころるし

うらりうらりてしづくも不らぬよとやうな歌をうたへて  
うらりよたぐひのき曲也ソノモノ尤愛をゆへたり  
と忍びてはのり流るるやどとやうそと具ナ  
つきてんよとくいのちをさくそくをさくまぐらん  
かよめつとくかぬ物ぬのちをぬおりのひえ  
ゆりてはこのるう一本気好てとやうな曲キヨクセリ折  
あつと求て目をよらつこの志めはるのちのさわ  
を愛するのりなりと具をくおちとたれハ新チ  
ようつと色なり本とも流るりきたるもさう  
はもありぬとて事也

凡人資約也以上三版皆資約の事と説也  
こは人ともやうなる志氣をみくこの人よ

神カミ 魚イサ 山ヤマ のり

世ふあつたがらん人先機キチなとてはつてあ  
しき事ハ人お耳にもさうひんもさうひん  
ま事とさうすはやうのちつとんわいさ  
但病イハレとさもさうみおのり事のは機嫌キゲンとはあ  
らなつとぞあしとてやしとれし生何異滅イヘ  
のうつりうらり実乃大事ハたせは河れみらぎ  
おらこしとてあしとてやしとれし生何異滅イヘ  
これいゆこのものもは俗ソコなつて必は



如斯夫不舍晝夜程子曰此道体也天運而不已日  
往則月來寒往則暑來水流而不息物生而不窮  
皆与道為体運乎晝夜未嘗已也

真俗

古ハ出世間俗ハ世間あり

去之れて後六韜云春道生万物榮夏道長万  
物成秋道歛万物盈冬道藏万物靜盈則藏々  
則復起莫知所終莫知所始

秋とくふひ

下くく海水と秋とくふ

原くくひとくふ泉れとくふとくふ

小春

四季ハを瓜四季次ありゆへ四季と云也

節序と云も是なり

下より上も未くは論語瞻之在前忽然在後

れきおひひ

程子曰今夫海水潮日出則水涸是潮退也其涸者已  
無也月出則潮水復生却不是將已涸之水為潮水自  
然能生也余安道海潮圖序古之言潮者多矣或言  
如橐籥翕張或言如人氣呼吸或云海鮑出處皆亡經  
據唐世盧肇著海潮賦以謂日入海而潮生月離日而  
潮大自謂極天人之論世莫敢非予嘗東至海門南  
至武山且夕候潮之進退弦望視潮之消息乃知盧  
氏之談出於臆臆所謂蓋不知而作者也夫陽燧取  
火於日陰鑑取水於月從其類也潮之漲退海非增

減蓋月之所臨則水往從之日月右轉而天左旋一日周  
照於四極故月臨卯酉則水漲乎東西月臨子午則潮  
平乎南北彼竭此盈往來不絕皆繫於月不繫於日  
何以知其然乎夫晝夜之運日東行一度月行十三度  
有奇故太陰西沒之期常緩於日三刻有奇潮之日緩  
其期率亦如是自朔至望常緩一夜潮自望至晦復  
緩一晝潮若因日入海激而為潮則何故緩不及期  
常三刻有奇乎肇又謂月去日遠其潮乃大合朔之  
際潮殆微絕此固不知潮之準也夫朔望前後月行  
差疾故晦前三日潮勢長朔後三日潮勢極大望亦  
如之非謂遠於日也月弦之際其行差遲故潮之去來  
亦合昏不盡非謂近於日也盈虛消息一於月張陽

所以分也夫春夏晝潮常大秋冬夜潮大蓋春為陽  
中秋為陰中歲之有春秋猶月之有朔望也故潮之極  
漲常在春秋之中濤之極大常在朔望之後此又天  
地之常数也昔竇氏為記以謂潮虛於午此候於  
東海者也近燕公著論以謂生於子此測於南海者  
也又嘗問於海賈云潮生東南此乘舟候潮而進退  
者耳右今之說以為地缺東南水飯之海賈云潮生  
東南亦近之矣今通二海之盈縮以誌其期西北二  
海所未嘗見故闕而不紀云嘗候於海門月加卯而  
潮平者日月合朔則且而平緩三刻有奇上弦則午  
而平望已前為晝潮望已後為夜潮此皆溟海之候  
也遠海之處則右有遠近之期月加酉而潮平者日



他亦入侍者ありつらるるをそのよせかけきこも  
如流は流不そとわり中が美ありと流

大匠の大譽

大匠の官は任さう新時流

郷應あり

宇治左大臣殿

宇治の忠左衛門頼朝公保元

の礼ようこれ抄ひぬ乞ハ知足院白忠實

公は二男法性寺笑白忠通公の弟也

東三條殿

拾芥中末云四條院誕生所成重

明親王家より

二條南町西南北二町忠仁公家貞

仁公大入道殿

傳領長久四年晦日焼失

筆をさしれハ物これ楽器をさすは者さうてんこ  
わりの盃をさしれハ酒をさしひりいをさしれさう  
うん事とさうふんハ必事ハこれさるかりも  
不善ハ戯をさすさうハあさうハ由ハ聖教ハ  
一句をさすハ何さうハ前後りふもハ自平ハ  
さうて多年ハ非をさすさうハ事ハありあり  
小い曲ハ多をさしひりげさうハけさうハ  
らむやハ先刻さうハ所の益ありハ又ハおさう  
どもハ佛ハありてさうハことハ理をさすハ  
急りさうハ善業をさすさうハ流さうハ教ハ  
たふありさうハ純麻ハ度ハはさうハてハ碑  
定りさうハ事理ハさうハ二をさすハ印ハ

りうむかざれい内鏡のめくは鏡之を升て不  
伝と云べしはあふさし是と云うと母へ  
等と云れハ異中ハ梨葉より下と茶器  
と云え茶をさそんと母ハ盃と云れハ酒と  
のまんと母ハさいと云れハ双六と云ん  
たりふとあり

陳師道思亭記云目之所視而思後之視于父思嗣  
視刀銘則思懼視廟社則思敬視第家則思安

攤ダうンとと相シ 韻會定韻攤他于切手  
布也增韻用也按也又廣韻攤蒲四敷也集韻亦  
書作攤シ 鮑宏博經意錢者何兼天纂文曰訖億

一曰射意一曰射教即攤錢也

李濟翁資暇集錢戲有每以四文為一列者即史  
傳云所意錢是也 俗謂之攤錢亦曰攤鋪其錢  
不使置狀欺惑也疾道之故謔其音々攤為蚕訖  
及音鋪為蒲厥義此耳今人書此錢戲率作標  
蒲字何貶標蒲其甚耶案標蒲起自老子今亦  
為呼盧者不宜雜其号於錢訖攤鋪義皎然可  
見 杜子美愛州歌長年三老長歌裡白晝攤錢  
高浪中箋註曰攤錢蜀人賭錢之名後漢梁冀  
傳少好意錢之戲注引何兼天纂文訖億一曰射  
意一曰射教即攤錢也

大鏡師輔云此傳シたうとせはあり双六スロウの事

と云くはんり

不善於戲と詩云善戲謔兮不為虐也

聖教 經海等と云

暫此字也白地とも云り

率尔 論語注率尔輕遽之見

繩床 梵網經よ菩薩十八物のうちあり

李白草書哥行宣州石硯墨色光吾師後倚繩

床 謂懷素

事理ゆくりあり 心こころと理こころも

と事とて事と理と成別として一偏と著

ありとハ理障事障と云てきこも也事理不二

ゆくりありハ各家此論也外相不肖内證必熟と

之も魚心信於此常談なり

盃れうこををけり事ハいづくゆゑと或人の為

うせ珍ひしと救當とゆりありこころありと

あつるもやん疾とゆりありありとあつる魚

道也流を乃こしてはけつとありありとあり

とぞわづらひ

救當 韻會當了浪及底也韓子玉卮無當註

無底也

魚道 下学集云魚道建殘盃也以餘瀝洗盃痕

喻之魚過旧道故曰魚道也魚雖游泳大海終不忘



平家物語の類ありり海ありりぬ河ありり  
勅解由小路二品禪門 世尊寺行忠也

ひろくありり 平張

薄摩たたく 薄摩ハ梵語也梵燒ハ鬘を梵ハ

たくと云ハ重言なりなり婦也云ハ水も梵ハ

はを重復ありり 河伽ハ水ハ梵語して河伽

乃水と云ハ摩訶ハ大の梵語して摩訶大迦葉

白んといりり

法深寺 赤山志河谷道あり

拾芥下本云清閑寺佐伯公行建立

花のさうり々を至りり百の十日やも時正は海  
七月と毎いどくまをよりり七十九日おやうをり

りり

時正 彼岸は中日と時正と云成僧家は況

龍樹菩薩の礼をひきと都率天の側り 霊

所臺ありりここに樹ありり二月花開七日七夜

而落秋八月七日果成摩醯首羅梵天帝釈等

名集りて七日之間世間善人悪人の名と市記

も生死此岸涅槃彼岸故曰宜取七日修善業い

ゆは春秋七日也は事たりりぬめや砥平石

録よ彼岸八日本の風俗也唐土よあれあり

いりり

遍照寺は承化法師池の寺と日外ふひつけ  
て堂乃うち下てえとまゝにたてた寺なりとの事  
これいふもあつては入らざりしはなとのれも  
りりていそこめてらるるはこころをゆるよそ  
かひいひどろくくすくすく草かりり  
すて人いほむきまの村名とのことおたひて  
入てるる大雁もあつたあり中に法師  
まじりておあせ福らこころは法師を  
らうへてはより使殿へ出さるるありこころ  
石の寺と頭よりけりて杯獄をいれり基  
後大納言別当の時よあん侍りり  
遍照寺 拾芥云廣澤僧正造地 僧正ハ寛朝

寺ありは寺嵯峨あり  
使廳 檢非違使廳也別當あり職原あり  
基俊 久我の門基具の二男也  
沙門の罪とい大方終るあつては近代の  
弊法也僧尼令とては訓戒を密より石晋高  
祖ハ佛像よくもの云と云ひおれて法氏を迷え  
僧徒を誅し唐乃李徳祐ハ甘露寺ハ常住物  
を訴は沙門と罪し柳渾を家よ放火せり偽  
を刑を棠陰法事ハいそあり

太衝乃太の字息うつらふ事 陰陽はな



あはれ下は人の都の人よ交りみやあはれ人高貴  
あはれめても紙をそよ本寺本山をそねれぬ  
顕密乃僧あはて我俗よあはれぞしそ人高貴  
りれるぞらうらう

我俗 我風俗をりり一かよ属は字とくきると我  
族類をりり

人高貴いよあはれあはれわらわらるるよまの白め若佛  
を作りとまはれあはれ金銀塔むはれさくそをいと  
そみ堂をそそんすりり佛ありまうまへと  
まらてよま安置をそんや人のあめりやみり  
やども下よりあはれる事 雪のこころうらうら  
いよあはれらうらま 甚多

雪佛 負和集子元雪佛頌一華發出一如未出

團々咲映用識得觸躰元是水聲耶宮裏不投胎

子元ハ佛光國師祖元也又雪達磨雪布袋とあはれ

雪めて其像を作りたり

又張文潜戲作雪獅絶句六出粧成百獸王日頭出後便

即當撐眉拄眼人誰怕想汝應無熱肺腸

雷とて獅子とほかりしるゝとてあり  
安曇 二字もふとていふもいふ也佛とて  
とていふ  
は辰雷佛のていふ金剛院の六崎莊子が物  
齒蟻蛸のたてくのふあり

一道よらうさりか人あつぬたはむりりりぞ  
みそそ春うがなるしうまふかていふは  
物をとらひいふもあつる事帯のていふなれ  
よふわりてえゆる也あつぬ道は浦山あつぬ  
ふあかうやまふちとてあつるはげりきんと

いひてありるん我智とていふ出て人ふあつる  
角つるもの角とていふあけ牙あるもの牙と  
るんといふいふいふ也人といふていふ善よやうぞ  
物とていふいふいふを他といふ他よまきいふ  
あつる大なる失也品の言とていふ才藝のまき  
とていふも先祖の言とていふ人よはつちとていふ  
りいふ人といふいふいふ也あつるいふいふも  
いふよそこといふのいふありはていふていふ  
とていふをいふもいふ人よもいふいふとていふ  
をいふもいふいふいふは慢心なり一及にも  
いふ人といふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

あゝぬ道の 我々よりぬあり  
 角ありもの 牛羊はまゝかひ 虎狼猶大の  
 しくふもさひのこゝろ也  
 昔よやくは 上をよるなり  
 呉のちさく 佐品のしりき也  
 うこけくのしりか 若干は罪あり也  
 をこにもみく 嗚呼とあり 世俗よ忘れもの  
 るんと云義なり  
 いひきされ といひけり也 深武帝を究  
 深氏名のこゝろ といひけれは 深  
 ねがひなり  
 志常よるるして 異本よるるして

とあり 曲禮志不可滿樂不可極

年老より人の一輩すこれより才結ありては人  
 のほみれはよるるんをどいつありいさなりか  
 どもそいさるもいつづきをさるはあまき  
 うれすこれより思のあらは一生け事よそ  
 みたりはほこきをく名ゆ今いそれになり  
 いひてありれん大方ありありと毎さる  
 いひちりよるるなりりのたよあゝあゝ  
 をのつゝあやまりもあゝぬ魚一ゆさるあも  
 辨へあゝびたもいひいりたをぬまゝとた





人の心はまろく思ひん人のほれくまてい  
しつゝふふいふ心ぬおどいんはぶらり  
あつらひつゝ 阮籍がまろく眼誰もあるま  
しかりまろくまろく人のありて乃どろ  
くありてろりゆるいよまろく又まろく  
まろくまろくおろりいひまろく

人のあり 人の許あり

論語子游曰有澹臺滅明者行不由徑非其事未嘗  
至於偃之室也

ねれ 人のまろく 我々志同  
まろくのありて 宗よりまろく

阮籍がまろく眼 竹林七賢の内也

晋書阮籍字嗣宗不拘礼教能为青白眼對之及嵇  
喜來吊籍作白眼喜不擇而退喜弟康聞之乃尙  
酒挾琴造寫籍大悅乃見青眼由是礼法之士疾之  
若讎籍時牽意独駕不由徑路車迹所窮輒慟哭  
而反

まろくまろく人のまろく  
見人のまろく用とれんまろく  
まろくまろくまろくまろく  
まろくまろくまろくまろく  
まろくまろくまろくまろく  
まろくまろくまろくまろく

何れは用事ハマロク

おしづきまじりあへんはたしむるものなり  
枕草紙さびかしく思ひ終るありうららかに  
くる人のそのはれくしく思ひあはるるひ  
よびくちあはれくしく思ひあはるるひ  
珠るすきしゆー はたの公的也右の地ま  
ふは洞の考合とて半見とてさく也  
け一版その事とあはれりまけて別版しる  
ふあり惺窩も別版せり

貝をわたり人の我まかなるをいそぐと余とて人  
まじりて人の被りけ膝あはるるまて貝とく

ぢりまにわたりとて人よあはれ思ふくあはる  
人と餘あまてまじりるくわふみまじりてあは  
きまじりたはるあはれあはるたあはるり  
慕盤のまみよをとなそりまじりにむひなる  
あをゆかりてけくあはるる我子の事を  
よく思ふくちあはるひまじりてあはるりけを  
きとてたり石必あはる茶の事ゆあひまじりてあ  
くまじりあはるるをたぐくまじりてあはる  
りまじり好事をりてあはるるまじりてあはる  
まじりてあはるるをたぐくまじりてあはる  
まじりてあはるるをたぐくまじりてあはる  
まじりてあはるるをたぐくまじりてあはる  
まじりてあはるるをたぐくまじりてあはる

風ありてあり風ありて病と津雲ありてありてあり  
ありてあり人ありてありてありてありてありてあり  
ありてあり人の無きやめありてありてありてありてあり  
ありてあり化ありてありてありてありてありてあり  
ありてありありてありてありてありてありてありてあり  
ありてありありてありてありてありてありてありてあり  
ありてありありてありてありてありてありてありてあり

貝をたれりふ 貝ありての事なり

棋盤の角より石をとりて

後漢書梁冀傳冀能挽滿彈棊注挽滿猶引強也  
藝經曰彈棊兩人對局白黑棊各六枚先引棊相當  
更先彈也其局以石為之  
事文類聚前集云魏文帝善彈棊能用手中角

時一書生又能低頭以所冠葛巾檄棊

ひどつとめ ひどみ也

箭の事ひどつとめ 貝をたれりふをとりて

ひどつとめひどつとめひどつとめひどつとめ

介をたれりひどつとめひどつとめ中庸子曰射有似

乎君子失諸正鵠反求諸其身

清獻公詞 言行錄後集五趙抃清獻公字閱

道衛州人舉進士事仁宗英宗神宗官至參政排

韻趙抃氣貌清逸人不可見其喜愠自号知非子為

待御史彈劾不避貴勢京師号為鉄面御史

皇朝類苑三十六云馮瀛王詩雖淺近而多義理曰

窮達皆由命何勞發漢邑但知行好事莫要問前

程冬去氷須泮春來草自生請君觀地理天道甚分明

遠國必そむく 論語遠人不服則修文德以來

之既未之則安之 注内治修然後遠人服有不服

則修德以來之亦不當動兵於遠

夙よあつり 本草序云真誥曰常不能慎事上

者自致百病之本而怨咎於神靈乎當夙卧濕反

責他人於失覆皆痴人也夫慎事上者謂舉動之

事必皆慎思

その化 法化也

禹のゆきて 書大禹謨帝曰咨禹惟時有苗弗

率汝徂征禹乃會群后三旬苗民逆命益曰惟德

動天無遠弗届禹班師振旅帝乃誕敷文德舞干羽于

兩階七旬有苗格蔡氏傳云三苗國名在江南荆揚之

間特險為亂者也

わうきく時く血氣うらよあまうりん物ようこきて

情欲たつり力とあやあめくくけんま事理

とをりしり又似りり義器とこりて室を

ほいやくしををを茶の枝めやつもつさあは

ふさうりのて物あそひんち軸うやみの

じお日よあつりてあまあかり情よめて行と

いさきよあつりて百年は力と得り命と大つり

たりし福有りしとてものまじく久しかりん  
 ことと思ひはきけりうたふひさそあうせむ  
 ありともかば力とあやうしむあはれ時のあまき  
 也たのり人の精汁の中ありくを流そりか  
 て感しうごくあやうふあつとあはれりな  
 れはををれりざとちりきりかきかけて懸  
 ろく人のまづひるん事と思ふ老て智  
 けりしに時よゆまれる事わくくしとわさち  
 の老くりにまきまきりかこし

論語曰君子有三戒少之時血氣  
 未定戒之在色及其壯也血氣方剛戒之在闘及  
 其老血氣既衰戒之在得

情欲 七情六欲也

むとりのうまひり 韻府張九齡議論如下坂走丸

義麗をこのとて 戦國の法公ふし川岩とあは

めて得履とくく代増と替す 唐のや年

の銀鞍白馬千金蛾眉を買の類也

苔のくもりと 魚眼ゆみか人の花の夜ふ成

よりり苔の夜よりくまきとせよ

を友武老威をが年十八して人の書と忠

びまをと殺しうまひうんそと救あやま

りて女の頸をきり入り、鷲るしうて出家

してあんと文免とつふあり教あり

百年はる 白氏文集卷四新樂府并底引銀

瓶云為君一日恩誤妾百年身

あましくとろそかして 年よりてハ枯れおと  
ろへ氣血淡薄にして物ハ感動する事ト云々

小節小節が事一さめてゆびくるもぞおの  
ころさゆハお造りて又もさるりけ又法外が  
おろりといふ洗われど言燈大師の法作は目録  
ぬいせり大師ハ承和のりよりたされ終り  
小節うろりちり事一まほのこもやるぬえ  
おぬ

小節小節 友今節小節小節をうの衣色  
ぬい流ありありぬるやうよそはよこは  
いりよれをうかのやまおあるふれありは  
ぬいぬいとうれぬいぬいぬいぬい

中院准后親房古今節小節小節事不  
知ぬ仁明天皇承和の法乃人出羽國郡司  
女國也無双の人也或洗ハ弘法大師法は  
しめゆふお造りておぬい玉はらりり  
小節と云者おぬいぬいぬいぬいぬい  
暮らりさゆとゆいぬいぬいぬいぬいぬい  
而小節玉造其姓者別の上他人より云事  
無款いさゆにもおぬいぬいぬいぬいぬい

方して令<sup>レ</sup>我<sup>カ</sup>を<sup>サ</sup>歎<sup>カ</sup>実<sup>カ</sup>方<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup>句<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>時<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>ゆ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>  
月<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>目<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>穴<sup>カ</sup>より<sup>カ</sup>落<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>生<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>み<sup>カ</sup>て  
らりの<sup>カ</sup>字<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>ち<sup>カ</sup>也<sup>カ</sup>小<sup>カ</sup>所<sup>カ</sup>思<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>前<sup>カ</sup>  
業<sup>カ</sup>平<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>め<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>文<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>前<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>大<sup>カ</sup>江<sup>カ</sup>  
非<sup>カ</sup>章<sup>カ</sup>が<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>め<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>時<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>後<sup>カ</sup>京<sup>カ</sup>朝<sup>カ</sup>約<sup>カ</sup>  
り<sup>カ</sup>解<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>成<sup>カ</sup>け<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>時<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>お<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>こ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>前<sup>カ</sup>  
文<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>康<sup>カ</sup>秀<sup>カ</sup>之<sup>カ</sup>河<sup>カ</sup>楢<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup>時<sup>カ</sup>果<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>や<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>  
時<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>む<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>あり<sup>カ</sup>

吾<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>抄<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>業<sup>カ</sup>平<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>み<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>む<sup>カ</sup>む<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>こ<sup>カ</sup>  
り<sup>カ</sup>け<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>程<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>む<sup>カ</sup>ん<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>教<sup>カ</sup>育<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>  
よ<sup>カ</sup>せ<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>み<sup>カ</sup>ち<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>  
り<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>や<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>始<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>や<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>程<sup>カ</sup>中<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>

あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>上<sup>カ</sup>句<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>深<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>秋<sup>カ</sup>風<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>吹<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>ぎ<sup>カ</sup>  
も<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>意<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>  
あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>お<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>文<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>多<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>死<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>  
つ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>べ<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>程<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>さ<sup>カ</sup>  
く<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>目<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>穴<sup>カ</sup>より<sup>カ</sup>落<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>本<sup>カ</sup>生<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>風<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>  
さ<sup>カ</sup>び<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>  
り<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>同<sup>カ</sup>或<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>活<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>小<sup>カ</sup>所<sup>カ</sup>小<sup>カ</sup>所<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>國<sup>カ</sup>  
よ<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>命<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>終<sup>カ</sup>ぬ<sup>カ</sup>別<sup>カ</sup>頭<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>や<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>  
よ<sup>カ</sup>業<sup>カ</sup>平<sup>カ</sup>衣<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>ね<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>涙<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>押<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>下<sup>カ</sup>句<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>付<sup>カ</sup>  
く<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>小<sup>カ</sup>所<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>小<sup>カ</sup>所<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>同<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>  
玉<sup>カ</sup>造<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>小<sup>カ</sup>所<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>小<sup>カ</sup>所<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>同<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>

人々がはつたまにさうしてあつたひつり  
人のさうりゆゑあり

お今十二三のつりもさうさ人のわぎけり日真  
河法師のさうりゆゑあり

よみて小町の小町さうりゆゑあり  
安信法行の信 信りゆゑも神なすぬ白

よと人さうぬめは後さうりゆゑあり  
と〜小町さうりゆゑなり神さむりゆゑ

孤はこれあつた河法師のさうりゆゑあり

顕彰古今抄、真静善祐法師弟子也善祐密  
通千條后者也、是異説也

お遠と云ふ 玉造小町子は表書云予行路に次

歩道之間徑邊途傍有一女人容貌憔悴身体疲瘦

予問女曰汝何御人誰家の子有父母哉無子孫歟

女答予曰昔是倡家之子良室之女焉壯時恇慢最

甚表日愁歎猶深云 又繁ぬる思也

法行 安信法行は三善法行は善相心云これあり淨苑

法行ありとさう世に善相心云これあり淨苑

貴而の父也と文章にも多く本物文粹にもあり

築道は達者也寛平延喜の法の人也

方野大師 弘法大師也大師附法傳并九尊釈

書第一の詳也

は後小町弘法時代前後の事といひ弘法八仁

明<sup>セウワ</sup>て皇<sup>ナニチユウ</sup>承<sup>カウシキ</sup>和<sup>ヒコ</sup>二年<sup>ヒコ</sup>正月<sup>ヒコ</sup>廿一日<sup>ヒコ</sup>入<sup>ヒコ</sup>定<sup>ヒコ</sup>年<sup>ヒコ</sup>六<sup>ヒコ</sup>十<sup>ヒコ</sup>三<sup>ヒコ</sup>其<sup>ヒコ</sup>年<sup>ヒコ</sup>生<sup>ヒコ</sup>  
於<sup>ヒコ</sup>著<sup>ヒコ</sup>述<sup>ヒコ</sup>三<sup>ヒコ</sup>教<sup>ヒコ</sup>指<sup>ヒコ</sup>歸<sup>ヒコ</sup>秘<sup>ヒコ</sup>府<sup>ヒコ</sup>論<sup>ヒコ</sup>性<sup>ヒコ</sup>靈<sup>ヒコ</sup>集<sup>ヒコ</sup>秘<sup>ヒコ</sup>藏<sup>ヒコ</sup>寶<sup>ヒコ</sup>鑰<sup>ヒコ</sup>  
等<sup>ヒコ</sup>乃<sup>ヒコ</sup>書<sup>ヒコ</sup>も<sup>ヒコ</sup>多<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>玉<sup>ヒコ</sup>造<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>又<sup>ヒコ</sup>も<sup>ヒコ</sup>大<sup>ヒコ</sup>師<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>作<sup>ヒコ</sup>なり<sup>ヒコ</sup>  
く<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>愈<sup>ヒコ</sup>好<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>云<sup>ヒコ</sup>こ<sup>ヒコ</sup>く<sup>ヒコ</sup>亨<sup>ヒコ</sup>治<sup>ヒコ</sup>年<sup>ヒコ</sup>中<sup>ヒコ</sup>に<sup>ヒコ</sup>沙<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>祐<sup>ヒコ</sup>成<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>玉<sup>ヒコ</sup>  
造<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>跋<sup>ヒコ</sup>にも<sup>ヒコ</sup>大<sup>ヒコ</sup>師<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>冲<sup>ヒコ</sup>作<sup>ヒコ</sup>也<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>云<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>今<sup>ヒコ</sup>真<sup>ヒコ</sup>言<sup>ヒコ</sup>家<sup>ヒコ</sup>  
君<sup>ヒコ</sup>れ<sup>ヒコ</sup>は<sup>ヒコ</sup>此<sup>ヒコ</sup>作<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>目<sup>ヒコ</sup>録<sup>ヒコ</sup>に<sup>ヒコ</sup>つ<sup>ヒコ</sup>づ<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>愈<sup>ヒコ</sup>好<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>云<sup>ヒコ</sup>こ<sup>ヒコ</sup>く<sup>ヒコ</sup>  
而<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>目<sup>ヒコ</sup>録<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>本<sup>ヒコ</sup>に<sup>ヒコ</sup>お<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>ぬ<sup>ヒコ</sup>や<sup>ヒコ</sup>又<sup>ヒコ</sup>玉<sup>ヒコ</sup>造<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>樂<sup>ヒコ</sup>天<sup>ヒコ</sup>  
秦<sup>ヒコ</sup>中<sup>ヒコ</sup>吟<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>詩<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>字<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>云<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>白<sup>ヒコ</sup>氏<sup>ヒコ</sup>文<sup>ヒコ</sup>集<sup>ヒコ</sup>才<sup>ヒコ</sup>二<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>秦<sup>ヒコ</sup>  
中<sup>ヒコ</sup>吟<sup>ヒコ</sup>ハ<sup>ヒコ</sup>長<sup>ヒコ</sup>安<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>て<sup>ヒコ</sup>貞<sup>ヒコ</sup>元<sup>ヒコ</sup>元<sup>ヒコ</sup>和<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>房<sup>ヒコ</sup>は<sup>ヒコ</sup>は<sup>ヒコ</sup>く<sup>ヒコ</sup>ま<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>あり<sup>ヒコ</sup>  
大<sup>ヒコ</sup>師<sup>ヒコ</sup>入<sup>ヒコ</sup>唐<sup>ヒコ</sup>ハ<sup>ヒコ</sup>貞<sup>ヒコ</sup>元<sup>ヒコ</sup>二<sup>ヒコ</sup>十<sup>ヒコ</sup>年<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>あり<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>あり<sup>ヒコ</sup>樂<sup>ヒコ</sup>天<sup>ヒコ</sup>が<sup>ヒコ</sup>死<sup>ヒコ</sup>云<sup>ヒコ</sup>  
と<sup>ヒコ</sup>大<sup>ヒコ</sup>中<sup>ヒコ</sup>元<sup>ヒコ</sup>年<sup>ヒコ</sup>日<sup>ヒコ</sup>本<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>承<sup>ヒコ</sup>和<sup>ヒコ</sup>十<sup>ヒコ</sup>四<sup>ヒコ</sup>年<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>あり<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>あり<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>大<sup>ヒコ</sup>  
師<sup>ヒコ</sup>入<sup>ヒコ</sup>定<sup>ヒコ</sup>より<sup>ヒコ</sup>十<sup>ヒコ</sup>二<sup>ヒコ</sup>年<sup>ヒコ</sup>迄<sup>ヒコ</sup>然<sup>ヒコ</sup>ハ<sup>ヒコ</sup>秦<sup>ヒコ</sup>中<sup>ヒコ</sup>吟<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>字<sup>ヒコ</sup>を<sup>ヒコ</sup>字<sup>ヒコ</sup>び<sup>ヒコ</sup>て

玉<sup>ヒコ</sup>造<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>作<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>や<sup>ヒコ</sup>も<sup>ヒコ</sup>大<sup>ヒコ</sup>師<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>お<sup>ヒコ</sup>わ<sup>ヒコ</sup>て<sup>ヒコ</sup>ハ<sup>ヒコ</sup>あ<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>  
ま<sup>ヒコ</sup>が<sup>ヒコ</sup>ひ<sup>ヒコ</sup>く<sup>ヒコ</sup>え<sup>ヒコ</sup>て<sup>ヒコ</sup>作<sup>ヒコ</sup>ら<sup>ヒコ</sup>ま<sup>ヒコ</sup>し<sup>ヒコ</sup>玉<sup>ヒコ</sup>造<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>文<sup>ヒコ</sup>大<sup>ヒコ</sup>師<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>筆<sup>ヒコ</sup>力<sup>ヒコ</sup>より<sup>ヒコ</sup>  
ま<sup>ヒコ</sup>よ<sup>ヒコ</sup>は<sup>ヒコ</sup>く<sup>ヒコ</sup>ね<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>や<sup>ヒコ</sup>作<sup>ヒコ</sup>ら<sup>ヒコ</sup>ん<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>法<sup>ヒコ</sup>師<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>小<sup>ヒコ</sup>町<sup>ヒコ</sup>  
同<sup>ヒコ</sup>時<sup>ヒコ</sup>を<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>や<sup>ヒコ</sup>う<sup>ヒコ</sup>に<sup>ヒコ</sup>在<sup>ヒコ</sup>る<sup>ヒコ</sup>集<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>云<sup>ヒコ</sup>こ<sup>ヒコ</sup>く<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>真<sup>ヒコ</sup>術<sup>ヒコ</sup>ハ<sup>ヒコ</sup>弘<sup>ヒコ</sup>法<sup>ヒコ</sup>  
は<sup>ヒコ</sup>賢<sup>ヒコ</sup>子<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>て<sup>ヒコ</sup>弘<sup>ヒコ</sup>法<sup>ヒコ</sup>入<sup>ヒコ</sup>定<sup>ヒコ</sup>より<sup>ヒコ</sup>廿<sup>ヒコ</sup>六<sup>ヒコ</sup>年<sup>ヒコ</sup>迄<sup>ヒコ</sup>貞<sup>ヒコ</sup>元<sup>ヒコ</sup>二<sup>ヒコ</sup>年<sup>ヒコ</sup>  
死<sup>ヒコ</sup>云<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>又<sup>ヒコ</sup>小<sup>ヒコ</sup>町<sup>ヒコ</sup>が<sup>ヒコ</sup>死<sup>ヒコ</sup>ひ<sup>ヒコ</sup>つ<sup>ヒコ</sup>つ<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>前<sup>ヒコ</sup>ハ<sup>ヒコ</sup>業<sup>ヒコ</sup>平<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>云<sup>ヒコ</sup>こ<sup>ヒコ</sup>く<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>  
沙<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>す<sup>ヒコ</sup>業<sup>ヒコ</sup>平<sup>ヒコ</sup>元<sup>ヒコ</sup>慶<sup>ヒコ</sup>四<sup>ヒコ</sup>年<sup>ヒコ</sup>五<sup>ヒコ</sup>十<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>云<sup>ヒコ</sup>こ<sup>ヒコ</sup>く<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>卒<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>大<sup>ヒコ</sup>師<sup>ヒコ</sup>  
入<sup>ヒコ</sup>定<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>時<sup>ヒコ</sup>業<sup>ヒコ</sup>平<sup>ヒコ</sup>纔<sup>ヒコ</sup>十<sup>ヒコ</sup>歳<sup>ヒコ</sup>也<sup>ヒコ</sup>小<sup>ヒコ</sup>町<sup>ヒコ</sup>ハ<sup>ヒコ</sup>廿<sup>ヒコ</sup>三<sup>ヒコ</sup>歳<sup>ヒコ</sup>  
の<sup>ヒコ</sup>人<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>云<sup>ヒコ</sup>こ<sup>ヒコ</sup>く<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>又<sup>ヒコ</sup>小<sup>ヒコ</sup>町<sup>ヒコ</sup>が<sup>ヒコ</sup>死<sup>ヒコ</sup>く<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>云<sup>ヒコ</sup>こ<sup>ヒコ</sup>く<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>  
ゆ<sup>ヒコ</sup>々<sup>ヒコ</sup>大<sup>ヒコ</sup>師<sup>ヒコ</sup>より<sup>ヒコ</sup>は<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>云<sup>ヒコ</sup>こ<sup>ヒコ</sup>く<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>也<sup>ヒコ</sup>玉<sup>ヒコ</sup>造<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>書<sup>ヒコ</sup>を<sup>ヒコ</sup>見<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>  
極<sup>ヒコ</sup>仙<sup>ヒコ</sup>窟<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>体<sup>ヒコ</sup>ハ<sup>ヒコ</sup>似<sup>ヒコ</sup>たり<sup>ヒコ</sup>而<sup>ヒコ</sup>も<sup>ヒコ</sup>あり<sup>ヒコ</sup>は<sup>ヒコ</sup>婦<sup>ヒコ</sup>人<sup>ヒコ</sup>の<sup>ヒコ</sup>羨<sup>ヒコ</sup>慕<sup>ヒコ</sup>歡<sup>ヒコ</sup>  
娛<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>り<sup>ヒコ</sup>て<sup>ヒコ</sup>は<sup>ヒコ</sup>老<sup>ヒコ</sup>衰<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>て<sup>ヒコ</sup>乞<sup>ヒコ</sup>丐<sup>ヒコ</sup>人<sup>ヒコ</sup>此<sup>ヒコ</sup>形<sup>ヒコ</sup>ハ<sup>ヒコ</sup>成<sup>ヒコ</sup>る<sup>ヒコ</sup>と<sup>ヒコ</sup>



小鷹にけりし大

史記蕭相國世家高帝曰夫獵追殺獸免者狗也而發蹤指示獸處者人也今諸君徒徒得之獸身功狗也至如蕭何發蹤指示切人也

史記李斯陰刑謂子曰吾欲与汝享黃犬臂羹鷹出上蔡逐狡兔得乎 史記左傳黃犬臂羹

文政十丁亥十一月六日舎砥用郡原町村低寫之此卷表題誤爲野槌上之二下之二也

中村直衛

